

「研究博物館」と現代展示

安田常雄

総合研究大学院大学教授 日本歴史研究専攻/人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館教授

歴史研究の成果は、論文・著作として発表されるだけでなく、「研究博物館」での展示として実現され、歴史を叙述する機能を果たしている。では、現代展示における歴史叙述とは何か？世界の博物館の試みと国立歴史民俗博物館(歴博)の構想を紹介する。

国立歴史民俗博物館ではいま、2010年3月のオープンを目指して、「現代展示」構想の準備を進めている。すでに今年3月には「近世」(江戸時代)がリニューアル・オープンし、これに続く計画として「現代展示」が完成すれば、開館以来懸案であった日本の歴史と文化を原始・古代から現代まで通史として展示する構想がよ

うやく完結することになる。また、それは同時に、もっともむずかしいと言われている「現代」を展示として提出することになるからである。

現段階で、構想中の「現代展示」の内容に踏みこんだ記述はできないが、研究博物館とは何かという観点から、「現代」を展示することの意味などについて雑感を記すことにしたい。

を記すことにしたい。

それぞれの国の問題意識が展示のかたちを創る

昨2007年3月、ベルリンの歴史博物館で開催された国際シンポジウムは、期せずして歴史展示、特に現代を展示することの意味をめぐって活発な報告と討論が

展開され、きわめて興味深い会合であった。すでに世界の博物館がいわゆる美術館的な性格を脱して、それぞれの国の固有の歴史を展示する方向に向かいつつあることは知っていたが、このシンポジウムはそうした一般的動向を超えて、それぞれの国が直面する現代的課題にいかに向き合い、それを展示というかたちをとって、いかに表象するかという試みに進みつつあることを鮮明に示していた。たとえばドイツ歴史博物館は一昨年のリニューアルによって、現代史展示が極めて充実したものとなっている。ローマ帝国崩壊期(AD493年)に起点をおく通史展示は、その約半分のスペースを1918年のドイツ革命以後に割き、そこでは第一次世界大戦以後のワイマル共和国時代の生活や文化にはじまり、ナチスの台頭と第二次世界大戦、ホロコースト、そして第二次世界大戦の敗北、さらには戦後の占領分割時代をへて、ベルリンの壁に象徴される冷戦による東西ドイツの対立と再統合までを扱っている。

そこでは、ナチスによるホロコーストの悲惨を冷静かつ客観的に提示し、同時に戦後における冷戦構造のなかの東西ドイツ分割の歴史的意味をバランスのとれた歴史記述として提出している。このパースペクティブは、1989年のベルリンの壁崩壊をくぐった現代史認識であり、そこにナチスによる戦争や冷戦による過去の悲惨を克服し、新しい歴史の方向を模索する文脈を提示しようとしている。

また参加した国々の試みでは、フランスが「移民」問題をいかに表象するかが課題だといえば、カナダ・オーストラリア・ニュージーランドはマイノリティ問題を含んだ「多文化主義」の表象を焦点とするといい、ポーランドは「自由」をキーワードに考え、ロシアはおそらく国家再建ヴィジョンとの関わりもあって、「近代化」(Modernization)と「市民性」(Citizenship)の構築を課題としているように見えた。それぞれの観点が通史展示のなかで、どのように構成されるかは今後の課題であるが、それぞれの国が直面

する緊急の課題への応答が歴史表象の骨組みとむすびついて模索されていることは間違いなさだろう。そしてこれらの視点がグローバル化との緊張をもって提起されていることもいうまでもない。

このように見てくれば、「現代展示」とはそれぞれの国の固有な現代史をどのような現代的問題意識から切り取り、いかにひとつのコンテクストとして再構成するかが重要であり、何を最も本質的な課題と考えるかによっていくつもの現代史が浮上することになる。その意味で「現代展示」はこうした歴史解釈の多元性を排除することはむずかしい。今回、特集の主題となっている「研究博物館」とはこの文脈で問題化するように思われる。

展示は歴史解釈を問いかける場

最近の博物館をめぐる表象分析などできりかえし指摘されているように、歴史博物館は近代国民国家の記憶の貯蔵庫として機能してきたことはまちがいない。

歴博「現代展示」構想における時代区分

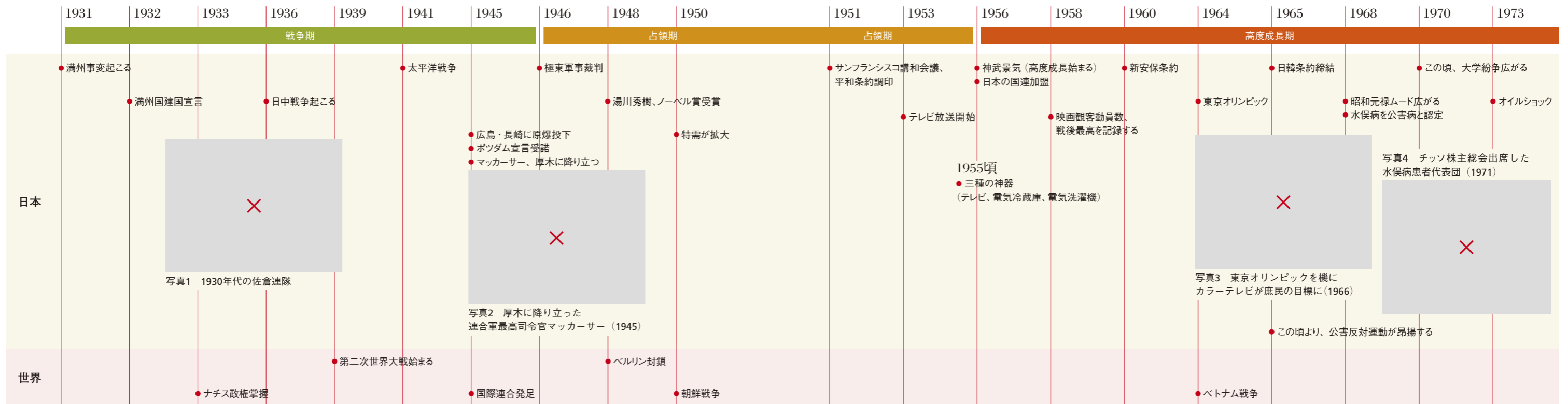




写真5 歴博の特別企画展「佐倉連隊にみる戦争の時代」で展示された内務班の再現模型(2006)。佐倉連隊とは歩兵第二連隊のことで、兵士たちは内務班と呼ばれる建物のなかで生活していた。

そこでは何よりも国民国家にとって記憶に値する事柄が選ばれ、それを時間の順序に従って記述することによって、国民国家の威光を復元しようとしてきた。それは英雄といわれる国家的偉人や国民をあげて戦った戦争の栄光などに象徴されており、これは資本主義国家でも社会主義国家でも変わらない。そこでは同時代を生きた人びとは、たとえば国民的戦争を懸命に担った被害者としての国民などとして従属的な存在として描かれるにすぎない。

しかし歴史研究の世界では、国家中心の視点によってある時代を描き出せるという考えは、すでにかなり以前より相対化されている。特に日本の歴史学に限っても1970年代以降、民衆史・生活史・女性史・社会史などの視点が提起され、また1980年代後半以後は、現代思想の流入の影響もあって、国家の中心部から遠くにいる境界の人びとをいかに捉え直すかなどの視点がおおきな影響力をもってきている。

その意味で「研究博物館」とは本来矛盾をふくんだ抗争の場ということを意味しているのだろう。その意味で「研究博物館」とは、展示の背後に周到な歴史研究の蓄積を必要とするという一般論だけを意味するわけではなく、国家や時の政治的要請に対し、それとは異質な歴史の意味を対置するせめぎあいの場であり、それゆえに、歴史の多義性ないし多元性が重要とならざるをえないのである。歴史の多義性や多元性とは、単にいろいろの見方があるというレベルの話ではないのである。そのためには、国家や政治に拘束されない研究の自由が存在しなければならぬ。

このように考えてくれば、現代史のような歴史解釈が分かれる世界では特に歴史の多義性の提示が重要なのであり、それは必然的に歴史の唯一の解答を提示するのではなく、仮説的な「問い」そのものを提示し、見る側の人びとに考えてもらうというスタンスが重要となるにちがいない。最近、「戦争博物館」を特集

した『朝日新聞』(2007年12月31日付)は、韓国でも国家公定の戦争解釈から自由な研究博物館の試みがあることを紹介している。

そして「問い」を発し、観客とともに考える研究博物館のイメージについて、次のように批評しているのである。「戦争、さらには歴史の展示は、見る側にも知力と体力がいる。相互作用でどのような公的記憶にたどり着こうとするのか。政治に委ねるばかりが『正史』ではない」。それは最終解答であるかどうかはわからないが、「研究博物館」が現在おかれている状況のなかでの一つの切実な選択であることはまちがいないと思われる。

日本の現代を三つの指標で分ける

昨2007年度から国立歴史民俗博物館では、館内の討議をへて、「博物館型研究統合」という基本理念を設定した。これはわかりやすいえば、「研究」と「展示」と「資料」の3本の柱が相互に密接な関係をもちつつ一体として展開していくイメージである。たとえば展示は、資料収集と研究に支えられて実現し、その展示の公開を通して、あらたな研究課題の設定と資料収集の展望も開かれていく。その意味でいえば、「研究博物館」とは、館外研究者をも含む共同研究の成果に支えられながら実現される展示を意味し、同時にそれによって旧来の研究のありかたに反省をうながす新たな研究課題の設定を意味するはずである。近年、ようやく歴史学会で議論されはじめたように、歴史展示とは研究の成果としての論文や著作とならぶ自立的な機能をもった「歴史叙述」であるとするれば、現在のところこうした認識もまだ十分に浸透しているとはとても言い難いが、今後、具体的な展示成果を通しながら、この「歴史叙述」の独自の機能をつきつめることは重要だと思われる。

ここではいま歴博で構想中の「現代展示」から若干の例をひきながら(前述のように現在進行中のことであり、あくまで現段階での構想である)、研究博物館における「歴史叙述」としての「現代展示」の独

自な機能とは何かについて簡略に触れることにしたい。

現在構想中の歴博「現代展示」は、ほぼ1930年代から敗戦をはさんで、高度経済成長が終息する1970年代までを対象とする。この時期区分はいわゆる昭和史を、「満州事変」に始まる戦争、アメリカを軸にした占領、そして神武景気に始まり起動した高度成長という三つの指標で切り取ることを意味し、逆にいうと1980年代以降はそれとは異なった時代に踏み込んでいくという時代認識にもとづいている。

前期の戦争の時代が1931年の「満州事変」にはじまり、中国との全面戦争に発展し、さらに日中戦争の泥沼に足をとられながら解決の方途を見つけないまま、日米戦争に突き進んでいき、沖縄戦と原爆に象徴されるように悲惨な結末をむかえることになったことはよく知られている。すでに歴博では2006年夏、特別企画展『佐倉連隊にみる戦争の時代』(写真5)を開催し多くの反響があったが、今回の常設展示ではこの成果を継承しつつ、反省も含めて、再構成する計画でいる。

第一は民衆とよばれる人びとがいかに兵士となるかのプロセスを追うこと、第二は「銃後」とよばれた地域社会の人びととの関係を通しながら、兵士という存在の意味を考えること、第三は兵士になった人びとが、中国および東南アジアでどのように行動したか、そして現地の人々との関係はどのようなものであったかの3点である。これは一面で「生活史」に重点をおく歴博リニューアルの基本コンセプトに立脚しているためであるが、同時に「国際的視点」の重要性という観点からは、一国的視点に限定されないひろがりを作る必要がある。具体的には、すでに植民地化されている朝鮮半島の人びととの関係や兵士として出て行った中国や東南アジアでの行動の歴史的意味という問題が重要であり、あわせて沖縄戦と原爆投下については、最近の研究史の進展をふまえて、斬新な展示方法を模索することが必要である。

後期の占領時代については、GHQ主導の戦後改革の成果をにらみながら、同時代を生きた人びとの「生活史」の観点から描き、あわせて1950年前後の占領政策の転換から「逆コース」・講和締結までを通史として描く計画である。また高度成長の時代については、一方でダム建設による電力供給を例に、これが企業復興と経済成長を実現し、また昭和30年代の団地生活を可能にしていく両面を描くことにする。そして最後には、大衆文化(映画・マンガ・雑誌・週刊誌・テレビなど)を通して、あらためて「戦後日本」とは何であったかを考えてもらいたいと思っている。ここでも基本コンセプトは、「生活史」と「国際的視点」を軸に、それぞれの時代のイメージを提示することを目的にしている。

時代像をどう捉えるべきか

それではこうした「現代展示」がもつ「歴史叙述」の独自性とはどこにあるのだろうか。

第一は何よりも現物資料のアクチュアリティにある。もちろん一方では、時代を画する重要文書資料の現物や複製、またパネルによる提出などはあるが、展示の特徴は現物資料そのものに接するときの驚きにあると思われる。現代展示は、すでにその時代を生きた人びとの記憶に内蔵されている素材も少なくないが、あらためてそれに接するとき、時代はその人のなかに鮮やかに甦ることになる。すでに前述の特別企画展で展示された軍隊内務班の原寸の造作、三八式歩兵銃などに大きな反響が寄せられていた。

第二は、時代像のヴィヴィッドな提示といえるだろう。しばしば指摘されるように、現在歴史の知識は断片的になり、それぞれの時代の全体像を思い描くことが難しくなっている。これは研究者も例外でなく、全体的視点なき細部の個別実証への埋没が一般化しているといつてよい。現代のトータルな時代像を描くためには、時代の両極をきちんと置くことが必要なのであり、それをもっとも象徴的な事物で提示することが時代の骨格を示

すことになると思われる。社会問題とよばれる出来事は、それぞれの時代の矛盾の表現として、時代性を両極としてとらえる重要な素材であるとともに、そのなかを生きた一人ひとりの人生そのものの表現となるはずである。たとえば、高度成長は一面では「豊かな生活」をもたらしたものであるが、その対極に水俣病事件における患者たちの「怨」の旗と菅笠・手甲脚絆で鈴鉦を手にした巡礼姿をおけば、それが近代という文明そのものへの深い疑いとなって表象されることになるはずである。

つまり時代像の提示のためには、細部への注視が不可欠なのであり、それを一瞬のうちに感受することができる機能をもつのではないだろうか。時代を象徴する異質な細部をできるだけちりばめること、そしてあたかも映像のモンタージュのように、異質な細部の資料が二つ並んだときにさまざまな「問い」が浮かび上がってくる。現代という時代像は、こうした迂回路を通して、私たちのなかにやってくるのであり、そこではじめて私たちは歴史としての現在に出会うことになるのである。



安田雄(やすだ・つねお) 専門は戦後日本の民衆史。同時代を生きた人びとの視点から、思想・運動・大衆文化などを調べている。またこうした観点から歴史叙述としての現代展示を通して、同時代を生きた人びとと共に広い視野から現代という時代を多面的に考えたい。